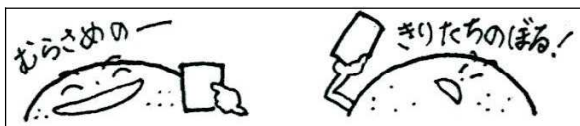


「こくら百人一首？」

校長 江口 満



暖冬の影響なのだろうか。我が家の梅の木が例年より一足先に開花した。例年ならば、暦の上での春の訪れを意味する2月4日(日)の立春あたりから咲き始めたはずだが。

この立春は、春の始まりを告げる日であり、昔の人々にとっては一年の始まりの日でもあった。そしてその前日の2月3日(土)の「節分」が、一年の終わりの「大晦日」。そこで邪気をはらい、幸せを願う「豆まき」が、もともとは大晦日の一般的な行事であった。しかしここ数十年の間に、豆まきと併せて、「恵方巻き」をその年の恵方(方角)に向けて丸かぶりする風習も全国的に行われるようになってきた。



この季節の年明けの時期に、本校では、「一、二年百人一首大会」が行われた。また三年生は、進路の大きな山場を迎えた。そして現在、三年生は3月5日(火)に行われる公立高校入学者選抜学力検査に向け、最後の追い込みを行っている。がんばれ受験生！



ところで、私は、子どもの頃からずっと気になっていることがある。それは、百人一首の札を入れる箱に「小倉百人一首」と書かれているからだ。父親になった私は、そのことを思い出し、娘に「ねえねえ、北九州市民なら小倉百人一首が、北九州市の小倉(こくら)で作られたと思ったことがあるやろ。一度くらい小倉(こくら)百人一首と読んだことがあるやろ。」と問うたのです。娘曰く。「そんなこと思ったことがないし、言ったこともない。」と、そっけない一言。「えっえー。」と私。

「それなら粒あんのことを『小倉あん』と言うのは、北九州市の小倉(こくら)で作られたからだ、今度こそ考えたことがあるやろ。」「小倉百人一首をおぐらと読むのだと知った時、八幡東区の尾倉町と何か関係があるのかもしれない、考えたことがあるやろ。」「じゃあJR小倉駅のことを、『おぐらえき』と読んだことないんねえー。」と、大人げなく娘に食い下がったのだ。(裏へ)



2月1日(木)二年百人一首大会の様子。数年前のコロナ禍の中、三密を避けるためのタブレット百人一首大会が思い出される。まだインフルエンザなどの感染対策を十分に注意を払っていかねばならないが、今回、体育館で取材して、ようやく平常が取り戻してきたという実感が湧いてくる。





【左から】二年百人一首大会 団体部門・チーム部門・個人部門表彰

さて娘が大学で一人暮らしをしていた夏。家内と京都の娘の下宿に出かけた時のことである。久しぶりに家族三人水入らずで嵯峨野を散策した。京福電鉄嵐山駅を出発し、周りの猛暑がまるで嘘のようにひんやりとして気持ちのよい嵯峨野の竹林(修学旅行で班別の記念写真現場)を通り抜け、一度は訪れてみたかった瀬戸内寂聴さんのお寺“寂庵”へ。そして石仏で知られる化野念仏寺へ歩きながら「修学旅行で訪れても楽しいコースだろうな」と思いを馳せていた。ちょうどその時だ。「小倉山」と書いてある標識を偶然にも発見したのだ。「小倉百人一首」発祥の地は、なんと、京都の嵯峨野にあったのだ。



恥ずかしながら私の勉強不足を痛感するとともに、積年の疑問というか、私の無知から生じた疑問というか、「ここで作られたんだ」と別の意味で感動した日になったのだ。



実はこの「小倉百人一首」の選者は、平安時代末期から鎌倉時代初期の頃の有名な歌人 藤原定家 だ。定家が、知り合いの人から山荘のふすまに貼る色紙の作成を頼まれ、それでこの百人一首を編集し書いて贈った。この定家の山荘が、京都嵯峨野の小倉山の麓にあり、そこで編集したために「小倉百人一首」という名がついたそう。

実はこの「小倉百人一首」の選者は、平安時代末期から鎌倉時代初期の頃の有名な歌人 藤原定家 だ。定家が、知り合いの人から山荘のふすまに貼る色紙の作成を頼まれ、それでこの百人一首を編集し書いて贈った。この定家の山荘が、京都嵯峨野の小倉山の麓にあり、そこで編集したために「小倉百人一首」という名がついたそう。



1月31日(水)一年百人一首大会の様子。大会講評で福元先生曰く「私の中学校時代に百人一首大会を行うという文化はなかった。だからそれを覚える機会がなかった。上ので勝負が決まる皆さんと一緒に競技しても、勝負にならないと思う。」私も同じである。

ちなみに「小倉あん」もこの小倉山が元になっているそうなのでびっくりした。調べてみると「小倉あん」の特徴は、こしあんの中に小豆がそのまま入っており、それが鹿の白い斑点に見えるということから「鹿の白い斑点(鹿ノ子模様)に似ている」→「鹿と言えば紅葉」→「紅葉と言えば京都の小倉山」の連想によって、「小豆と言えば小倉」ということになったそうなのです。そして百人一首の中にもこの小倉山の紅葉を歌った句があった。

小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ

(藤原忠平：880～949)

【現代語訳】 小倉山の峰を美しくいどるもみぢ葉よ。もし、おまえにも物のあわれのわかる心があるなら、そんなに散るのを急がずに、もう一度天皇がここにいらっしゃるときまで待っていてくれないか。



さて、百人一首大会当日、冬休み前から各学級とも猛練習を重ね、一、二年生の皆さんはその成果を大いに発揮していた。百人一首の熱い競技、生徒の皆さんの笑顔に、私の心はポッカポッカになっていた。



一年百人一首大会 団体部門表彰